

アジア養蜂研究協会

アジア養蜂研究協会第6回大会

まとめと提言

1. アジア地域には極めて多様なミツバチ種が生息するが、社会的生産基盤整備の遅れ、的確な技術を持つ人材の不足、科学研究や技術訓練と振興普及事業のための施設や資金の不足などの制限要因があり、アジアにおける養蜂が本来の可能性を發揮するにはまだかなりの支援を必要とすると本大会は認識する。そこでアジア養蜂研究協会(AAA)はアジアの養蜂再興のため“ミツバチ研究と養蜂研修センター”設立をめざして総合的、組織的な努力をすべきであると決議する。このセンターは養蜂研修と研究計画に対する国際的資金援助を、とくに国連の食糧農業機関(FAO)や日本の国際協力事業団(JICA)などの開発援助団体から受けるべきである。
2. 本大会は農環境システムにおける送粉昆虫の役割の重要性を認識し、送粉昆虫を保全、保護、活用する必要があると考える。AAAは生物多様性条約に則り、アジア地域の花粉媒介に関する適正な実施案策定に着手すべきである。
3. アピセラピーは急速に認められてきた科学研究である。AAAは関係分野の監督官庁と医療関係者がミツバチ生産物の有効性を示す科学的研究を正しく認識し、アピセラピーを代替医療の1分野と考え、取り扱うことを促す。
4. オオミツバチの自然生息環境内営巣場所は保護する必要がある。オオミツバチが多数営巣するイチジク属などの樹木は国の天然記念物に指定されるべきである。Century Foundationもこの運動に着手するよう我々は要請する。
5. 在来ミツバチ種(野生、飼養群共)を保護、増殖しようとする試みは、まず私的企業や非政府団体によって着手されるべきである。
6. アジアには伝統的、あるいは適正な養蜂技術が豊富にある。貴重な情報であるこれら技術・風習が失われるまえに収集、文書化し、広く認識されるよう努力すべきである。
7. ミツバチトゲダニ、ミツバチヘギイタダニ、

- タイサックブルード病, ヨーロッパ腐蛆病はアジアのミツバチに対する大きな脅威である。AAAは加盟各国に優秀なミツバチ病理学者を養成し、更に次回AAAフィリピン大会でのミツバチ病害敵ワークショップ開催を決意する。
8. 養蜂は知識と技術を要する科学的活動であり、独自の飼養管理法が求められる。AAAは研修を積み高い技術を持つ養蜂振興中核メンバーの養成を求める。これに適した人材は理論的研究者よりむしろ経験のある養蜂家であろう。
 9. 養蜂振興計画作成へ大きな障害が、アジア地域のミツバチと養蜂に関する正確で科学的な情報データベース不足である。養蜂研究や普及事業関係組織からは養蜂の現状について異なる、相対する数字が発表されている。AAAは養蜂活動状況を国勢調査の項目に加えるよう各国に推奨する。またメンバーの誰もが利用できる養蜂情報データベース作成をAAAに望む。
 10. セイヨウミツバチはアジア全域で導入され、在来種ミツバチの遺伝資源激減をもたらした。メンバー各国の政府がセイヨウミツバチ普及地域とトウヨウミツバチ保全地域を区分し、貧困対策、地域環境保全、性差別問題に役立つ養蜂政策を採るようAAAは求めるべきである。
 11. アジア地域に生息する多様なミツバチ種は将来の養蜂発展に不可欠な遺伝資源である。AAAはミツバチ種の多様性維持のため、生息地保全と再生、外来種(セイヨウミツバチ)導入規制、及び殺虫剤使用の規制を求める。オオミツバチとヒマラヤオオミツバチを保護するハニーハンティング規制立法措置には、ハニーハンターが野生巣から持続可能な採集法を学ぶ、参加型資源管理法の修得を伴う必要がある。
 12. アジア産ミツバチ生産物には国際市場の品質基準を満たさない物が多い。AAAは適正なハチミツ採集法と加工処理技術が養蜂家に指導され、ハチミツへの不適切な科学汚染物質(イオウ、殺ダニ剤、抗生物質など)の混入が防止されることを求める。